

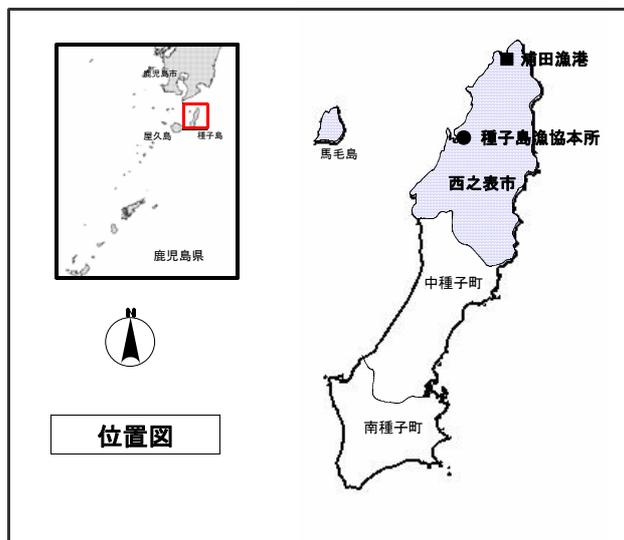
# 協業体と青年部活動に取り組んで

種子島漁業協同組合 中河 輝幸

## 1 地域の概要

鉄砲伝来とロケットの打ち上げで知られる種子島は鹿児島市から南へ115km、高速船で1時間半の距離にあり、黒潮の恵を大きく受け、カンパチ、トビウオ、サバ、キビナゴ、トコブシ・イセエビ、アサヒガニ等の特徴のある水産資源が豊富である。

また温暖な気候は、サトウキビやサツマイモなどの農産物の栽培にも適しており、最近ではサーフィンやダイビングなどのマリンスポーツでも人気を集めるなど、自然の魅力にあふれた島である。



## 2 漁業の概要

私の所属する種子島漁業協同組合は、平成19年度の組合員数が567名（正328名、准239名）、水揚げ量が955トン、水揚げ金額が8億3百万円で、一本釣、磯建網漁、キビナゴ刺網、トビウオ漁、アサヒガニかかり網漁、トコブシ漁などの特徴のある漁業が行われている。

中でも一本釣漁業は、水揚げ金額の約20%を占める主要漁業で、カンパチ、サバ、ホタテ類、タルメ（メダイ）等が漁獲され、19年度の漁獲量が223トン、漁獲金額は1億7千万円であった。

## 3 私の漁業経歴と活動への取組

### (1) 就業の経緯

私は西之表市の浦田で生まれ育ち、父親も漁師であったことから、小学生の頃から父親の船に乗せてもらい、当時から漁師になろうと考え、高校も鹿児島水産高校に入学した。高校卒業後はマグロ漁船に乗ろうかと考えた時もあったが、当時は一本釣が最盛期の頃でもあり、人よりも早く技術を身につけたいと考え、卒業後すぐに父親の船に乗り、主に一本釣とモジャコ漁に従事した。漁業を始めてから10年目位から自分が中心となり漁をするようになったが、今も父親とともに親子で漁を行っている。

### (2) 漁の現状と活動への取組

現在も一本釣とモジャコ漁を中心に操業しており、4～5月モジャコ漁、5～6月サバ、7～12月はカンパチ、ホタテの瀬物類、12月～3月はタルメやアラ延縄漁を行って

る。

春～秋の一本釣時期は、朝に出港し、夕方頃に帰って来るが、冬場は時化が多く操業出来る日数が少ないため、5～6年前から、昼はホタ（アオダイ）やイナゴ（ヒメダイ）釣、夜はタルメ釣の組み合わせで1昼夜操業するなど、少しでも水揚げを増やそうと工夫している。

しかし私が漁を始めたころと比べると、漁獲量はそれほど変わらないものの、水揚げ金額は1割以上減少した。

魚の値段は上がらず、燃油等の経費も上昇している厳しい中、何とか漁業を続けていくために、魚を捕るだけではなく、販路の拡大や魚食普及にも取り組む必要があると考え、地元の中核的協業体や青年部の活動を通じて、それらの取組を行っているところである。

#### 4 中核的漁業者協業体での取組

##### (1) 協業体取組の経緯

私の住んでいる浦田地区は種子島の中でも一本釣が盛んな地区であるが、一本釣でカンパチ等が大量に捕れた時は値段が一気に下がることが問題であった。そのため出荷調整用の一時蓄養施設を要望していたところ、漁港整備事業で浦田漁港内に蓄養水面が整備された。その蓄養施設を活用し出荷調整を行うだけでなく、販路の拡大や付加価値向上も併せて取り組もうとのことで、熊毛支庁の勧めもあり、中核的協業体をつくり活動を行うこととなった。



蓄養場の状況（浦田漁港内）

17年度に協業体をつくるための協議や先進地視察等を行ったが、地区内の一本釣の漁業者には年配の方も多く、その方達をどう活動に引き込み、体制作りを行うかに苦慮したが、「浦田いっぽん釣協業体」として平成18年3月に県の認定を受け、構成員16名で活動を開始した。

##### (2) 協業体活動内容

平成18、19年度は、中核的漁業者協業体等取組支援事業として助成を受けながら以下の様な活動を行ってきた。

###### ① 機材の整備

蓄養に必要な機材の整備として、18年度は網洗い機と船外機を、19年度には追加の生簀2基を整備した。

###### ② 蓄養・出荷の実績

一本釣りで漁獲したカンパチやゴマサバ、ブリ等を生簀で蓄養し、18年度は約8トン、19年度は約9トン出荷した。

###### ③ 市場開拓・直販活動

新たな市場の開拓として、これまでほとんど取引が無かった奈良の市場へ、カンパチ、

イナゴを出荷した。比較的良い評価が得られたものの、残念ながら出荷コストや入金  
のトラブルなどもあり継続的に出荷する段階までには至らなかった。

また、県漁連の販売施設であるおいどん市場へも、少量ではあるが、タルメ、イナゴ  
等を出荷したところ、価格は安定しており、消費者に対する宣伝効果も大きいと考えら  
れた。

#### ④ 広報宣伝資材の整備

浦田いっぽん釣の魚や活動の広報  
宣伝資材として、出荷用発泡スチロ  
ール箱に貼るシール、販売用シール、  
ポスター、パンフレット、のぼ  
りを製作した。販売用のシールは、  
島内の仲買・小売り店や県漁連に配  
布し、協業体の魚を販売する場合は  
貼附してもらうようお願いした。

#### ⑤ 販売促進活動

漁協青年部等と連携して、おいど  
ん市場や西之表市内の量販店、市の  
農林水産祭りなどで、試食販売や広  
報活動を行った。

また、協業体のホームページを作成し、協業体で漁獲される魚や調理法などを広く一  
般に紹介できるようにした。



浦田いっぽん釣協業体広報宣伝資材

## 5 青年部活動

### (1) 漁協青年部活動

漁協青年部には、漁業を始めた当初から加入し活動を続けており、平成18年度からは  
部長として部員の協力をもらい活動している。活動の内容は、以前は藻場造成等の活動  
を中心に取り組んできたが、現在は販売促進活動を中心としている。

#### ① 島外での活動

鹿児島市で開催されていた、農林水  
産祭りやみなとゆめ市場に参加し、青  
年部で作成したキビナゴの一夜干しの  
販売を行った。

また、平成18年には、キビナゴが豊  
漁だったこともあり、県内での種子島  
産キビナゴの認知を高め、新たな販路  
を開拓しようと、鹿児島市内の飲食店  
を廻りキビナゴの無料配布も行った。

#### ② 島内での活動

種子島の一本釣で漁獲されるメダイ  
は地元ではタルメと呼ばれ、冬場を中



種子島漁協青年部タルメ販売促進活動

心に種子島で大量に漁獲されるにもかかわらず、その多くが島外に出荷され、地元ではあまり知られていない魚である。最盛期になると魚価が下がり島外出荷では経費を差し引くと手取りはわずかとなる。その為もっと島内でも消費してもらおうと考え、平成18年から西之表市内のスーパーと連携し、青年部が試食・宣伝を行い、販売はスーパーが行う形でタルメの販売促進活動をしている。

日頃は買う人が少ないタルメが、試食とあわせてPRすることにより多くの人がタルメを気に入り、日頃の何倍もの売れ行きとなる。魚を捕るだけでなく、食べ方の提案も必要だと痛感した。

## (2) 種子屋久地区漁協青年部連合会

### ① 設立までの経緯

先に述べたように種子島漁協青年部としていろいろな活動に取り組んでいるが、他の青年部同様、10年ほど前は30名以上いた部員も現在は18名と減少しており、活動も難しくなっている。

そのような中、熊毛支庁から種子島と屋久島の青年部で一緒になり種子屋久地区の水産振興のために活動しないかとの提案があった。以前から同じ島内の南種子町漁協青壮年部とは交流があり、いろいろな活動を通じてつきあいも多かったが、屋久島とは個人的には知り合いは多いものの、青年部として交流は無い状態であった。しかし、これからは我々のような若手の種子屋久の漁業者がまとまって活動する組織が必要と考え、青年部内で協議したところ、みんなの了解も得られたため種子島漁協青年部として、種子屋久での青年部の連合会作りに協力していくこととなった。

平成19年1月に初めて種子屋久の3漁協青壮年部で集まり交流会を行い、種子屋久地区全体の漁協青年部組織の構築について協議を行った。会には同様な組織の先輩である奄美群島水産青年協議会の役員の方や、地元漁業士の方々、県漁青連の坂元会長にも出席いただき、「協議会によりいろいろな情報交換が出来るようになり良かった」、「同じ漁場で漁をする仲間として一緒になって問題に取り組んでいけばどうか」などの助言をもらい、みんなで一緒にやっっていこうとのことになった。

その後、どのような組織にするかの検討を各青年部の役員が集まり約1年間かけて行い、平成20年3月6日に、種子島・南種子町・屋久島3漁協青(壮)年部部員を会員とする、「種子屋久地区漁協青年部連合会」が誕生した。



## 種子屋久地区漁協青年部連合会設立総会

(H20.3.8南日本新聞)

## ②種子屋久地区漁協青年部連合会の概要

種子屋久地区漁協青年部連合会の目的は、熊毛地区における水産の諸課題解決と、地域の水産業を活性化し熊毛地区の水産振興に寄与することとし、設立時の部員数は54名で、役員は各青壮年部から2名選出の計6名とし、私が初代会長として選任された。活動としては、部員間の交流を深めるとともに、研修会や、魚食普及活動、熊毛地区外の青年部等との交流及び情報交換等を行っていくこととした。

### 種子屋久地区漁協青年部連合会概要

- 会 員：熊毛地区漁業協同組合の青年部若しくは青壮年部
- 目 的：  
会員相互の協力及び水産関係機関・団体との緊密な連携と協力により熊毛地区における水産の諸課題解決に努めるとともに、地域の水産業を活性化し熊毛地区の水産振興に寄与する
- 役 員：会長、副会長、監事、幹事3名 計6名
- 事務局：会長の所属する漁業協同組合
- 活動経費：会費、助成金(熊毛地区水産振興会、熊毛地区漁協長等連絡協議会)
- 主な活動(予定)
  - ・部員間の交流及び情報交換
  - ・研修会の開催
  - ・熊毛の水産に関する普及啓発(水産物販売促進活動等)
  - ・熊毛地区外の青年部等との交流及び情報交換(県漁青連活動への参加)
  - ・その他(視察研修、漁具・漁法等の改良等)

## ③活動状況

設立した19年度は、設立時期が遅かった関係で設立総会時に併せて「県一漁協合併について」の研修会を実施したのみとなった。

20年度は8月末に総会を開催し、出来たばかりの会でもあり、まずは親睦を深める必要があると考え、総会後にスポーツ大会を開催した。当日は生憎の雨で予定していたソフトボールは開催出来なかったが、代替りのバレーボールで白熱した戦いとなった。

魚食普及のための活動としては、20年10月に本県で開催された、ねんりんピック鹿児島関連イベントの特産品の展示即売会に参加した。

イベントの開催期間が3日間、熊毛から参加すると準備・撤収の為に前泊・後泊が必要のため5日間と長期の参加となる。参加する部員の負担も大きく、経費もかかるため参加を見送ることも検討したが、めったに無いイベントであり、設立したばかりの組織の良いPRにもなると考え参加することになった。

各漁協青年部毎に、キビナゴやトビウオの一夜干、トビウオのすり身を持ち寄り、試食・販売を行った。残念ながら売れ行きはあまり良くなかったが、少しでも種子屋久の魚のPRに貢献でき、特に種子屋久地区漁協青年部連合会の初めての対外的な活動として、島外で長期に渡るイベントに参加出来たことは、今後の活動の大きな糧になったと考えている。



種子屋久地区漁協青年部連合会  
ねんりんピックイベント参加

## 6 今後の活動について

### (1) 中核的協業体

過去2カ年の活動で、機材や広報資材の整備や、蓄養等の体制整備は確立されつつあり、20年度もカンパチ等の蓄養・出荷を行っている。しかし、新たな販路の開拓については十分な成果が得られていないため、今後も漁協や県漁連との連携や情報交換を行いながら、協業体として新たな販路拡大の努力を続ける必要がある。

### (2) 青年部活動

種子島漁協青年部として、地域のイベントに参加し販促を行う等の活動もこれまでと同様に行っていこうと考えている。

種子屋久地区漁協青年部連合会は、組織として誕生したばかりで、まだまだ部員間の連携も充分でない。また、同じ地区内とはいえ、種子島、屋久島どちらかに集まり活動するにも船での行き来となるため、時間や交通費を要するなどの問題もある。しかし、種子屋久の同じ漁場で漁に取り組む者として漁協間の垣根を越えて自由に情報交換を行えるようになるとともに、これまで単協青年部では出来なかった、種子屋久地区のお魚祭りのようなこともやっていきたいと考えている。

## 7 最後に

協業体や青年部による販売促進活動を通じて、実際に魚を買ってもらおう奥さん方と話す機会も多く得られた。その中で実感したことは、当たり前のことではあるけれども、「ただ魚を丸ごと売るだけではだめだ」ということだ。

奥さん方が求めているものは、すぐにでも食べられるよう捌いて食べやすい状態になっていることであったり、浜には季節ごとにこんな魚があつて、こんな食べ方をすれば美味しいんだよ、という情報であつた。

そして、それを可能とするためには、「獲ることは一人でできても、売ることはみんな協力していかないとできない」ということである。

今後もちろん協業体による活動は続けていく。

しかし、ややもすると忘れがちなこの当たり前の事実を、漁協青年部活動や種子屋久地区漁協青年部連合会での活動においても常に忘れず、皆に伝えていきたい。そして、協業体、青年部、種子屋久連合会の仲間と一緒に、種子屋久の魚をもっと知ってもらい、食べてもらえるよう頑張っていきたい。